

編集後記

昨年の編集後記（2007年1月号）にはフランスのレンヌ第一大学に短期（半月）滞在のときに感じた日本人とフランス人の共通点と違いについて述べた。今年はより長く（三ヶ月）滞在する機会をえて、現在家族とともに生活している。昨年は、すべての会話（挨拶）を「ooo la la?」（ジョークのつもり）でごまかしたが、さすがに三ヶ月ともなるとそうはいくまいと思ひ、それなりに電子辞書（音声付き）、ニンテンドーDS（地球の歩き方フランス版）など購入してフランスに乗り込んだが、全く活きていない。5歳の息子のほうが遥かに吸収が早く、買い物では「今の何ユーロっていった？」などと息子に聞く始末である。

さて、今回の滞在で強く感じたことは「フランス人はおしんの心をもっている」ということだ。とにかくフランス人は我慢強い。レストラン、祭りなどの露店、銀行、駅のチケット売り場いたるところで長い行列ができるが、みんな不平を口にせず（していてもわかりませんが）じっとしている。パリのターミナル駅の1つ、サンラザール駅で夜9時に電車を降りて、20人しか待っていないタクシー乗り場でまさか1時間半も待たされるとは思ってもみなかった。日本なら長い行列があれば、店側も客側もなるべく、最小限の会話、用件のみですませようとするが、フランスでは（何を会話しているかわからないが）表情から察するに明らかに雑談をしている。待たされているほうからしたら、余計にいらいらする光景である。ただ自分の順番がまわってくると話は別である。日本への一時帰国を終え、レンヌに戻る途中に、大規模ストライキに巻き込まれ、電車のないモンパルナス駅で啞然としながら案内所に駆け込んだとき、担当の男性がホテルを何件も探してくれた上に、高すぎると値下げ交渉もしてくれた。

我慢するのは日本人の専売特許と思っていたが逆ではないかと思ひ始めてきた。日本人には *opinion* がないと揶揄されるが、それをもって我慢では話にならない。最近の日本での大学の研究は、応用や実用化に近い一見華やかな研究に対してお金をばらまく、合衆国型に近づいている傾向にある。しかし、基礎研究は、うわべだけの華やかさに振り回されない一途な忍耐が必要である。今年のノーベル物理学賞は、巨大磁気抵抗効果を発見したアルベール・フェールとペーター・グリュンベルクに与えられた。彼らの発見が我々の日常生活を大きく変えたが、大事なのはこの発見が欧州型基礎研究から生まれたことである。こちらのフランス人の知り合いが、フランスもそれなりに合衆国側に近づいてはいるが、今年を受賞で基礎研究はしばらく安泰だろうとのこと。フランス（欧州?）の魅力を実感している。ただし、スト以外。

（直交ダイマー）